

## 瀬戸の島々と神戸



加藤琢二  
ジャンボフェリー株式会社  
(神戸旅客船協会会長、  
神戸大学非常勤講師)

## ◆はじめに

最近、観光資源としての瀬戸内海がよく話題となります。「シーボルトやトマス・クックが絶賛した多島美」といった美辞麗句も耳にしますが、風光明媚なエリアは他にも全国に数多存在します。観光客に足を運んでいただくには、やはり、そのエリアが持つ歴史的、文化的なストーリーづくりが大事ではないでしょうか。そうした思いで、瀬戸内海に浮かぶ島々の魅力の一端を「神戸との繋がり」をテーマにご紹介いたします。

## ◆伊吹島

伊吹島は、銭形砂絵で有名な観音寺から船で 25 分、<sup>ひょうなんざ</sup>燈籠にボンと浮かぶ面積約 1 km<sup>2</sup>、人口約 400 名、ハート形をした小さな島です。讃岐うどんの出汁の素「いりこ」の島として知られています。いりこはカタクチイワシを獲ってからどれだけ魚体を傷めず早く茹で上げるかで品質が決まります。この点で伊吹島は、漁場の真ん中という優位性を活かし、ロジスティックの手本とでもいうべき収穫—運搬—加工システムを構築しています。早朝に船を出し、二艘引きのパッチ網漁で魚を獲るや否や直ちに高速船に積み替えて島に戻り、海岸沿いの加工場に船を横付けし、船倉にホースを突っ込んでポンプで一気に吸い上げ、工場内の釜に放り込みます。船が着いてから茹で上がるまで約 20 分、「浮沈空母」ならぬ「浮沈加工船」です。

伊吹島と神戸には意外な繋がりがあります。それは「三好長慶」です。摂津を本拠にした室町末期の天下人で、神戸港を保護し、その発展にも寄与しました。伊吹の島民の多くは、この長慶の末裔といわれています。長慶の死後、子の義継は信長の攻めによって自害しますが、孫の義兼、義茂はなんとか逃げ延びて島に辿り着いたそうです。島民の大半は「三好さん」。長慶までさかのぼる家系図もあるそうです。

◆<sup>しおく</sup>塩飽諸島

塩飽諸島は、西讃の沖合に広がる大小 28 の島々です。ここには三大お国自慢があります。一つ目は「塩飽水軍」。村上水軍は武器を持つ軍隊でしたが、塩飽水軍は武器を持たない船乗りや船大工などの技術集団でした。その伝統は明治になるまで続き、太平洋横断した咸臨丸の水夫 50 人中 35 名は塩飽の出身でした。二つ目の自慢は「塩飽大工」。島の廻船業が徐々に衰退する中、島の船大工は、宮大工や家大工へと転身していきます。岡山の西大寺、香川の善通寺など、

その作品は各地に残っています。神戸の海軍操練所や湊川神社の旧社もそうです。三つ目の自慢は「人名制(にんみょうせい)」。秀吉の時代に水軍として功績が認められ島民の自治が許されます。それは徳川幕府にも引き継がれます。選挙で選ばれた島民の代表が交代で政務をとるという極めて近代的な制度でした。

## ◆本島

塩飽諸島の中心の島は、丸亀から船で約 30 分の沖合にある本島です。面積は約 6 km<sup>2</sup>、人口は約 400 人。島の見どころは、人名制の役場「塩飽勤番所」と塩飽大工の見事な作品群「笠島集落」。笠島集落は国指定の伝統文化財にもなっています。

本島も神戸と意外な繋がりがあります。それは「神戸洋家具」です。神戸発祥のモノとしてはゴルフや洋菓子などが有名ですが、実は西洋家具も神戸発祥です。その創始者とされる一人が本島出身の塩飽大工、真木徳助さんなのです。明治初めに神戸に来て、家具の製作所を立ち上げたそうです。

◆<sup>さなぎ</sup>佐柳島

塩飽諸島でもう一つ紹介したい島が、多度津から船で 50 分の佐柳島です。佐柳島の別名は「猫島」。人よりも猫が多い島です。島のご当地グルメは「茶がゆ」。高知県の<sup>おとよ</sup>大豊町でしか作られていない碁石茶という特殊な発酵茶を使っています。島一番の見どころは「お墓」。島には両墓制という風習が残り、埋葬する「埋め墓」とお祀りする「詣り墓」に分かれています。穏やかな海に囲まれた墓地の前に立つと、時空を超えた感覚となります。

佐柳島も神戸と深い繋がりがあります。それは「神戸ウォーター」です。神戸の水は、長い航海でも腐らない水として外国船員たちの間で有名でしたが、この水を大型船に補給する事業を支えていたのが佐柳の人々なのです。神戸港で給水会社を最初に立ち上げたのは、佐柳出身の村田惣吉さんです。会社の名前は神戸良水社。社員は島の人ばかりでした。明治 38 年に神戸市がこれを公営化しましたが、その際に村田さんがお願いした唯一の条件が島出身者の優先雇用でした。このため公営化後も佐柳の人々が神戸港の給水事業を支え続けることとなりました。

## ◆おわりに

今のような車社会になるまでは、瀬戸内海は人流・物流の大動脈の一つであり、大きな運河の役割を果たしていました。そこに浮かぶ島々はいわば高速道路のサービスエリア。昔、船は世の中で一番速い乗り物でしたから、島は各地の情報や文化がいち早く伝わる場所でもあったと思います。

瀬戸の島々には独特の文化や風習が残っています。その中には島の孤立性から生まれたものもあるとは思いますが、各地の人や情報が交差していたからこそ生まれたものが多いと感じます。旅を通じて瀬戸の島々の歴史や文化を知ること、交通ネットワークが果たす社会的な役割を改めて実感していただければ幸いです。